

## 1945年三河地震の被災者心理と行動パターン

### — 災害発生後 100 時間 失見当、救助・救出、安否確認 —

名古屋大学大学院 環境学研究科\* 木村 玲欧, 林 能成

#### Behavioral and Psychological Pattern of Victims in the 1945 Mikawa Earthquake - Focused on Disorientation Phase: around 100 Hours after Earthquake Occurred-

Reo KIMURA and Yoshinari HAYASHI

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University,  
Furocho, Chikusa, Nagoya, 464-8601 Japan

This paper clarified behavioral and psychological pattern of disaster victims within the first 100 hours after disaster occurred. We analyzed the sixteen interviews of victims of the 1945 Mikawa Earthquake. We extracted knowledge and lessons about three behaviors and feelings; “disorientation”, “Saving and Rescue”, “Confirmation of Safety” which are typical in the 100 hours. The significance of this study is generalizing and visualizing knowledge and lessons from the past disaster is effective for citizens to image disaster phenomenon and understand preparedness and response to the disaster in the future. The representative knowledge and lessons are as follows: 1) “Disorientation” was the common psychological state around the first 10 hours. 2) When victims buried under the wreckage in heavily-damaged area, they only saved or rescued themselves without community support mechanisms. 3) Finishing confirmation of victims’ family members safety was a key ingredient in the recipe for making a start on other important disaster responses.

#### § 1.はじめに

##### 1.1 戦争によって葬りさらされた直下型地震

1945年(昭和20年)1月13日午前3時38分、震度7の激震が愛知県三河地方を襲った。マグニチュード6.8の内陸直下型地震により、2,306人[飯田, 1978]もの命が奪われた。第二次世界大戦末期の、しかも重要軍需産業地での大災害であったため、被害など具体的なようすは一切報道されず、地震の詳細も伏せられたまま歴史から葬り去られた。

筆者らは、教育研究拠点の東海地方における過去の大災害である三河地震について、被災者へのインタビュー調査を行い、地域に埋もれている被災体験・災害資料(写真・古文書など)の発掘や、災害教訓を視覚的に表現した教材の作成を行ってきた[木村・林, 2004&2005]。また、自然科学と社会科学の研究者が共働して、三河地震の震源過程や被災体験を詳細に掘り起こし、地震の全容を再現した[木股他, 2005]。

本論文ではこれまでのインタビュー調査で得られた被災者の被災体験を用いながら、地震発生から発生後100時間前後までにおける被災像を明らかにしたい。この100時間は、災害発生後の心理的時間の流れにおける最初の2段階であり[木村他, 2004]、この時期の意識の持ち方や災害対応の達成状況が、その後の効果的な災害対応やひいては生活再建の達成度にも影響を与える。本研究では、事例をもとに、地震発生から100時間までの被災者の意識・行動を理解することで、将来に起こる災害時の効果的な対応や備えに寄与することを目的とする。

##### 1.2 インタビュー調査の実施

被災体験を明らかにするインタビュー調査は、2003年10月から始まった。本論文執筆時点である2006年1月までに16件行っている。インタビュー対象者を選定する際には、安城市歴史博物館、蒲都市生命の海科学館などの機関や、安城市の町内会長などのキ

\* 〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町 環境総合館



図1 被災体験を描いた絵画  
Fig 1. Paintings of the Survivors' Experience

一パーソンを頼りに被災者を紹介してもらい、簡単な事前インタビュー(スクリーニング調査)を行ったうえで、被害が大きく、また災害対応で苦労した人や、生活再建でさまざまな課題を解決した人に目星をつけて、2~4時間にわたる正式インタビューを行っている。

また、インタビューによって得られた「災害や防災の知見・教訓」を日本画家によって色彩画にする試みも行っている。文字では伝えにくい知見・教訓を絵画によって視覚化することで、文字よりも理解しやすいかたちで市民に伝えることができると考えたからである[木村・林, 2005]。

1回のインタビューにつき、色彩画は5~12枚ほど作成している。絵にする場面を選ぶ際には、1)防災の目的である「いのちを守る」「くらしを守る」ための後世への教訓として適切だと思われる被害のようす、災害時の対応行動・生活再建のようす、支援のようすであること、2)インタビュー(インタビュー対象者)の記憶がはっきりしていて印象深い場面であること、3)一人の人間にスポットライトをあて、被災から復興までを追えるようにすること、という3つの基準から場面を選定し、日本画家に描いていただいている。

本論文執筆時点(2006年1月)で90枚程度の絵画が作成されている。図1はその絵の一部である。左側

が災害発生直後の瞬間の絵で、右側に行くにしたがって時間が経過し、いちばん右側が震災から最も時間が経過したときの絵である。横に青く囲ってある部分は1人の被災体験であり、被災してから生活を再建していくまで、どのように意識・行動が移り変わったのかを時間に沿って整理している。

## §2.被災者の心理的時間感覚

### 2.1 四つのタイムフェーズ

被災体験をインタビューする時には、災害後の被災者が置かれる心的状態に沿った形でインタビューを行い、より鮮明に記憶を思いだすように工夫している。阪神・淡路大震災などの研究[木村他, 2004]から、災害による衝撃を受けたあと、人や社会は4つの段階を経ながら生活を建て直していくことが明らかになってきた(図2)。

最初の段階は災害が発生してから10時間前後、震災当日にあたる「失見当(しつけんとう)」の時期である。失見当とはもともと精神医学の用語であるが、災害時には「震災の衝撃から強いストレスを受けて、自分の身のまわりで一体何が起きているのかを客観的に判断することが難しくなり、視野が狭まってしまう状態」と定義することができる。つまり、どんな人でも

必ず一瞬は頭が真っ白になって慌ててしまう時期で、理性的な判断や全体的な視野に基づいた対応行動が一部のプロの集団を除いては困難な時期と考えられる。人によって差はあるものの、災害発生から10時間前後(つまり災害当日)において、誰もがこのような精神状態におかれると考えられている。

2つめの段階は災害発生後10~100(10<sup>2</sup>)時間、つまり震災後2~4日間前後にあたる「被災地社会の成立」の時期である。災害・被害の全体像がだんだん明らかになってきて、周囲の人たちと「大変なことになった。お宅のところはどうだった。うちはこうだった。これからどうなってしまおうのだろう」などと情報交換をしながら、被害の全体像を把握し、震災前の日常とは違う新しい現実自分たちが置かれてしまったことを理性的に受け止める時期といわれている。

3つめの段階は災害が発生してから100(10<sup>2</sup>)~1000(10<sup>3</sup>)時間(約2ヶ月)にあたる「災害ユートピア」の時期である。例えば阪神・淡路大震災での避難所生活に見られるように、「毎日を精一杯生きる」ために、みんなで炊き出しをしたり、一時的なルールを作って生活をする。そこには性別や年齢、災害前の社会的な地位は関係ない。そういう一種の原始共産制のような社会であり、「頑張ろう、神戸」という言葉のもとに復旧・復興を行う時期である。

4つめの段階は災害発生後1000(10<sup>3</sup>)時間(約2ヶ月)以降にあたる「現実への帰還」の時期である。水道やガスなどのライフラインが回復していくにしたがって、家屋被害などの軽い人から自宅に戻っていく。「避難所などでみんなと一緒に頑張る」という被災地社会が終焉をむかえ、人々が新たな日常生活の中へと戻っていく時期である。この四つの段階を経て人々は生活を再建していくということが考えられている。

## 2.2 「失見当期」「被災地社会の成立期」の課題

災害発生後100時間前後までの「失見当期」「被災地社会の成立期」において、被災者の意識・行動にどのような特徴があり、また災害対応においてどのような課題が挙げられるだろうか。

この時期における代表的な意識・行動・災害対応に、「失見当」「救助・救出」「安否確認」の3つがあげられる。いずれもその後の生活再建の達成度にも大きく影響するような意識・行動である。本論文では、三河地震被災者に対するインタビューで明らかになった「失見当」「救助・救出」「安否確認」の姿について述べ、そこからどのような被災像が明らかになり、どのような来たるべき災害への備えが提案できるかについて述べていく。

## §3. 失見当

### 3.1 地震直後の体験

最初は地震直後の体験について事例を紹介し、そ

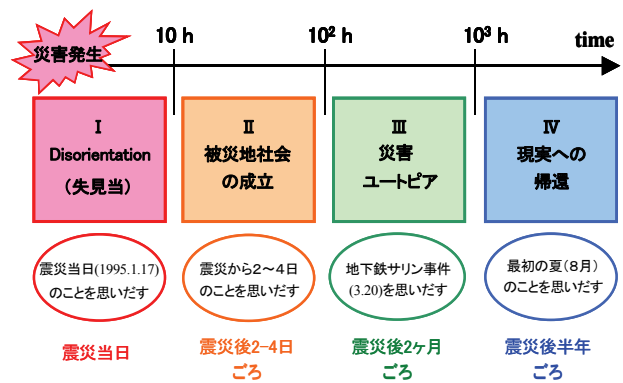


図2 被災者の心理的時間感覚

Fig.2 Four Time Phases after the Earthquake Based on the Psychological Timeline

こから失見当の特徴と課題について考察する。

#### 富田達躬さん(当時16歳)

碧海郡櫻井村藤井集落(現在の愛知県安城市藤井町)にいた富田達躬さん(当時16歳)は、就寝中に激しい上下動が来て何もすることができなかった。揺れがおさまったあと、電気をつけようと布団に入ったまま手を伸ばしたら、直接天井に手がついた。びっくりしたけれども、建物が松の木にもたれかかってペシヤットとならなかったため、自分は助かった(図3-1)。

#### 杉浦隆三さん(当時20歳)

碧海郡明治村東端集落(現在の愛知県安城市東端町)にいた杉浦隆三さん(当時20歳)は、三河地震のときのゆれが大きく、寝ていた母屋は傾いてしまった。そこで家族は傾いた母屋を飛び出して納屋に入り、余震が続く中、夜が明けるまで震えながら納屋に避難していた。

#### 岡田菊雄さん(当時12歳)

碧海郡明治村根崎集落(現在の愛知県安城市根崎町)にいた岡田菊雄さん(当時12歳)は、当時小学生だった。地震の揺れを感じたときに、なぜか自分では分からないけれど、パッと頭を布団の中に亀のようにすぼめた。その瞬間、上から梁がドンと枕のところに落ちてきて、自分は助かることができた。今から思うと結果的に頭を守ったということになった(図3-2)。

#### 岩瀬繁松さん(当時17歳)

碧海郡明治村城ヶ入集落(現在の愛知県安城市城ヶ入町)の岩瀬繁松さん(当時17歳)は、地震が起きたあと、「家から外に出よう」と思って必死になって余震のなかを寝床から縁側まで這っていったとき、傾いていた家がペシヤットとつぶれた。家が倒れる衝撃で、自分は庭のもみがらの上にポンと放り出された(図3-3)。

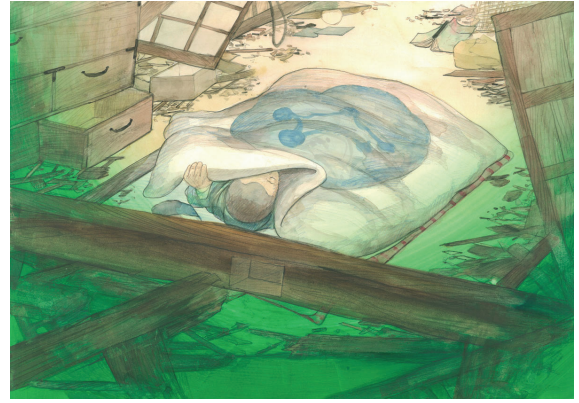
#### 原田三郎さん(当時25歳)

碧海郡明治村西端集落(現在の愛知県碧南市湖





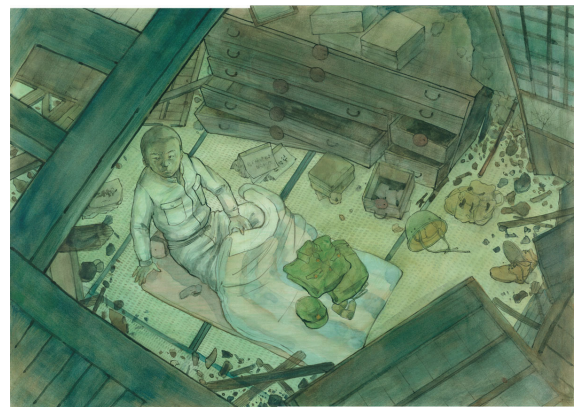
3-1 富田達躬さんの被災体験  
Mr. Tatsumi TOMITA's experience



3-2 岡田菊雄さんの被災体験  
Mr. Kikuo OKADA's experience



3-3 岩瀬繁松さんの被災体験  
Mr. Shigematsu IWASE's experience



3-4 原田三郎さんの被災体験  
Mr. Saburo HARADA's experience

図3 失見当期の被災体験

Fig 3. Paintings of the Survivors' Experience in "Disorientation Phase"

西町)にいた原田三郎さん(当時 25 歳)は、軍隊にいる習慣のため服は布団の上に置いて、靴も布団脇に備えていた。そのため地震後、すぐ身支度をして家から出ることができた(図 3-4)。

### 3.2 失見当の状態

前節で述べたような被災体験をふまえて「地震の直後、どのようなことを感じたり思ったりしましたか」と尋ねた。すると「何を感じたのかあまりよく覚えていない」と回答した人が多かった。

例えば富田達躬さんは、「地震時には家の倒れる音は聞こえなかったし、震災当日は冬で裸足なのに冷たいという感覚は一切なかった。緊張していたのか、風邪も引かなかった」という振り返りをしている。杉浦隆三さんは「とにかく朝まで震えながらそこにいた」と述べている。

震災後に迅速な対応をした原田三郎さんも「震災当日は無我夢中で何が何だか覚えていないのだけ

れど、震災当日の写真をたくさん持っていることから考えると、写真をひたすら撮っていたのだろう」と回顧している(図 4)。

地震発生後 10 時間前後の失見当と呼ばれる状況で共通するのは、通常よりも視野が狭くなって、より客観的に思考判断することが難しい時期であると考えられている。訳も分からずワーストになってしまう人、ただ震えながらそこにいる人、必死で安否確認や救助などに専心する人など、人によってさまざまな失見当の状態がインタビューから明らかになった。

### 3.3 失見当の事例から浮かびあがってきた教訓

この時期の被災者の意識・行動のようすを収集していると、「『どうしよう、どうしよう』と恐れ慌てる気持ちが一層の判断能力を奪ってしまい、その結果、冷静に考えれば分かったことなのに、適切でない対応行動をとってしまった」ことを後悔する体験がみられる。

富田達躬さんを例にとると、富田さん家では、おばあさんが梁の下敷きになった。その事実を知った富田さんの父親が、ワーツと慌てた感じで中に入って行って、おばあさんのの上に乗っかっている梁を山のこぎりで引いた。しかし切ったところがおばあさんの真上だったため、梁が切れたときに家の重みがすべておばあさんのの上に乗っかってしまい、おばあさんは死んでしまった(図 5)。

富田さんは「おじさんは慌ててしまってね。真上を切ったからそうなってしまったんだけど、あの時ちょっとでも考えておれば、そんなもん、切れば力がかかるのは分かっているで、ちゃんと左の方とか右の方とか、ちょっと外したところを切れば、おばあさんは助かったかもしれないのにね」と回想している。もしもの話なので、この真偽を検証することは不可能だし意味がないが、やはり「慌ててしまった」ことが引き起こした対応の一つであると考えられる。

このような心理状態を「心理パニック」と呼ぶが、この時の特徴は、焦ってしまうことで判断能力が更に低下し、簡単な対応すらできなくなることである。これを防災における教訓として昇華させると、『震災時にはどのような人でも一瞬心の中が真っ白になって慌ててしまう』という理解を事前にとっておくことが考えられる。被災者の心理状態についての正しい理解が、実際に震災に見舞われて自分が被災者となり失見当の状態に陥ってしまったときも、「こういう状態は自分だけではなくて、人間としてごく自然な状態なのだ」という認識につながり、必要以上に慌てず、その結果、不適切な対応行動が低減されることが期待される。

## § 4. 救助・救出

### 4.1 阪神・淡路大震災における救助・救出

次に震災における救助・救出について、「生き埋めになった人の救助・救出」を取り上げる。

救助・救出に関する教訓として代表的なものに、阪神・淡路大震災における救助・救出のようすが挙げられる。図 6 は日本火災学会(1996)の行った調査データで「実際に生き埋めになったり閉じ込められたりしたときに、あなたは一体だれに助けられましたか」という調査の結果である。「自分で脱出した」という人が 34.9%、「家族に助けられた」という人が 31.9%、「友人・隣人に救助してもらった」という人が 28.1%だった。また「救急・消防に助けられた」人が 1.7%という低い割合であった。これは地元の救急・消防の対応能力を超える生き埋め者が発生し、電話が輻輳してつながらず、また出動したとしてもガレキの中で車両が現場に到達しない事実があったことが考えられる。

災害対応の主体として、自助・共助・公助の 3 つが挙げられるが、実際に地域で被害が起こってしまうと、助ける人は自助か共助しかないのだということが阪神・淡路大震災の経験から明らかになってきた。



図 4 原田三郎さんの被災体験

Fig.4. Mr. Saburo HARADA's experience



図 5 富田達躬さんの被災体験

Fig.5. Mr. Tatsumi TOMITA's experience

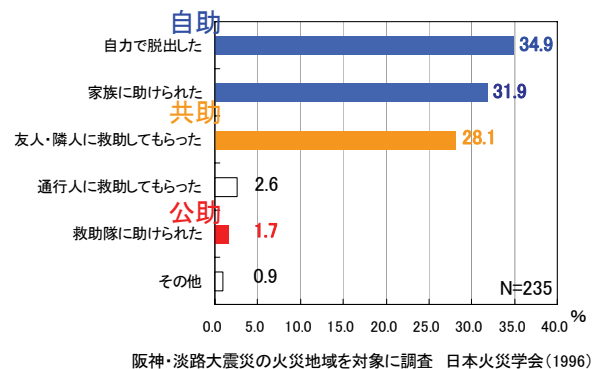


図 6 生き埋め者の救助

Fig.6. Who rescued a person buried in the 1995 Hanshin-Awaji earthquake

### 4.2 三河地震における救助・救出の体験

前節であげたような救助・救出が、三河地震においてはどのようであったのかを以下に述べる。

#### 岩瀬繁松さん(当時 17 歳)

碧海郡明治村城ヶ入集落(現在の愛知県安城市城ヶ入町)の岩瀬繁松さん(当時 17 歳)は、母と二人暮



らしだった。自分自身は家が倒れる衝撃で庭のもみがらの上に放り出されたが、後をついてきた母親は生き埋めになってしまった。しかし、隣組で下敷きになった人はなく、みな無事だったので、総出で母の救出を手伝ってくれた(図 7-1)。

#### 岡田菊雄さん(当時 12 歳)

碧海郡明治村根崎集落(現在の愛知県安城市根崎町)にいた岡田菊雄さん(当時 12 歳)は、2 階建ての家の 1 階部分がつぶれてしまい、家の中に閉じこめられた。真っ暗だったが、たまたま壁がはがれ落ちていて外の星空の光がもれていた。そこでそばで泣きわめいている妹を抱きかかえて、かすか遠くに見える星空を頼りに家から外に脱出することができた(図 7-2)。

#### 早川ミサコさん(当時 15 歳)

碧海郡明治村和泉集落(現在の愛知県安城市和泉町)の早川ミサコさん(当時 15 歳)は、母屋で寝ているときに地震に襲われ、訳がわからないうちに家が倒れて、ミサコさんが上、おばあさんが下で折り重なるように鴨居の下敷きになった。おばあさんはそのまま亡くなったが、ミサコさんは朝になって隣接する明治航空基地の兵隊さんに助けだされた(図 7-3)。

#### 原田三郎さん(当時 25 歳)

碧海郡明治村西端集落(現在の愛知県碧南市湖西町)にいた原田三郎さん(当時 25 歳)の集落では、軍隊出身の原田さんが自力で外にでたところ、「助けてくれ」という小さな声が足もとから聞こえてきた。ふと見ると、隣のおばあさんが崩れた家の下敷きになっていた。そこで必死になって瓦をはがして救出した。道具がなく素手で言うしかなかった(図 7-4)。

#### 富田達躬さん(当時 16 歳)

碧海郡櫻井村藤井集落(現在の愛知県安城市藤井町)にいた富田達躬さん(当時 16 歳)は、隣の家が火事になり、梁に足を挟まれた隣の女学生が「助けてくれ」と必死で叫び続けていた。しかし、周囲の家も全壊し、みんな自分の家のことで精一杯で、誰も助けあげることができず、女学生の声は次第に小さくなっていき、じきに消えてしまった(図 7-5)。

### 4.3 救助・救出の実態

これらの救助・救出の実態をまとめていく。岩瀬繁松さんは、隣組の家が無被害だったために総出で母親の救助をおこなった。共助の力が役立った一例だと考えられる。岡田菊雄さんは、壁がはがれ落ちたために逃げる方向がわかり、光も差し込んでいたために外にでることができた。岡田さんは「幸運だった」と言っているが、自力(自助)によって脱出をした一例である。早川ミサコさんは、近くの軍隊が災害対応従事者となり、効果的な災害対応をしてくれた。公的機関(公助)によって助けだされた例である。

ところが、原田三郎さんの集落では、周囲の多くの家が潰れていた。軍隊出身の原田さんが自力で脱出

し、さらに隣のおばあさんの声に気づいたから良かったが、もし原田さんが脱出できず、またおばあさんの声に気づかなかつたら、助けてくれる人は誰もいなかったかもしれない。

さらに富田達躬さんの経験では、自分の家も周りも甚大な被害に見舞われていた。富田さんの集落ではどの家でも死者が出ている状態で、富田さんの家でも 2 人の人が亡くなった。このような状態のときには、もはや共助というものはいくらも使えないことが容易に想像できる。

### 4.4 救助・救出の事例から浮かびあがってきた教訓

阪神・淡路大震災の教訓では「救助・救出には自助と共助が大切で、大都市ではないところは共助が生きているから、政令指定都市以外のところでは共助がもっと有効に働いて救助・救出できるのではないか」と考えられていた。しかし、当時農村部だった三河地震の明治村周辺の被災像をみると、大きな被害を受けてしまうと、やはり基本は自助であることがわかってきた。現代の社会に置き換えると、例えば、家の耐震補強、家具の転倒防止などによって「下敷きにならない」工夫をしておく。自分がすぐ外に逃げられるように日ごろから靴や光を備えておくという「自助努力による備え」が大きな意味を持っていることが考えられる。

また、現代社会においては高齢者の救助・救出に関する備えも必要不可欠である。平成 17 年度の高齢社会白書によると、65 歳以上の高齢者がいる世帯数は、平成 15(2003)年現在 1,727 万世帯であり、全世帯(4,580 万世帯)の 37.7%を占めている。内訳をみると、単独世帯が 341 万世帯(19.7%)、夫婦のみの世帯が 485 万世帯(28.1%)、親と未婚の子のみの世帯が 273 万世帯(15.8%)、三世帯世帯が 417 万世帯(24.1%)となっている[内閣府、2005]。つまり、高齢者の単独世帯・夫婦のみ世帯が全世帯の約 20%を占めており、少なくともこれらの世帯では、被害にあったあと、自助での脱出が難しいことが考えられる。

特にこのような世帯では、普段から「災害が起きたときには自分の家を安否確認してほしい」という希望を自治会や自主防災組織等に伝えておいて、生き埋めになってしまったときには、救助・救出を共助に頼るような仕組みを事前に作っておくことが必要である。

さらに、素手でしか救助・救出できないような事態にならないように、救助・救出に必要な資機材を地域や各家庭で事前に整えることも重要である。車の中や庭の物置などといった、家がつぶれたとしても容易に取り出せるような場所に備えておくことが効果的だと考えられる。原田三郎さんは「道具がなく素手で救出したのは、戦争中で物がなかったからだ」と述べているが、今、地震が起こったときに、果たして自分の身の回りで助け出すことができるような資機材が十分備



7-1 岩瀬繁松さんの被災体験  
Mr. Shigematsu IWASE's experience



7-2 岡田菊雄さんの被災体験  
Mr. Kikuo OKADA's experience



7-3 早川ミサコさんの被災体験  
Ms. Misako HAYAKAWA's experience



7-4 原田三郎さんの被災体験  
Mr. Saburo HARADA's experience



7-5 富田達躬さんの被災体験  
Mr. Tatsumi TOMITA's experience

図7 救助・救出の被災体験

Fig 7. Paintings of "Saving and Rescue"  
of the Survivors' Experience in the disaster

えられているのかは、大きな疑問である。60年前の戦争中の教訓が、今なお活かしている好例である。

## §5. 安否確認

### 5.1 安否確認の体験

最後に安否確認について、三河地震の事例を紹介

する。

#### 岡田菊雄さん(当時12歳)

碧海郡明治村根崎集落(現在の愛知県安城市根崎町)にいた岡田菊雄さん(当時12歳)。岡田さんと妹は潰れた家から出ることができたが、弟がいつまでたっても出てこない。父がのこぎりをもって急いで家の

中に入って弟を捜した。弟はあと一步で抜け出せるところで、鴨居の下敷きになって亡くなっていた(図8-1)。

#### 杉浦隆三さん(当時 20 歳)

碧海郡明治村東端集落(現在の愛知県安城市東端町)にいた杉浦隆三さん(当時 20 歳)は、余震の中、納屋で震えていた。しかし父親だけは、同じ集落のはずれに嫁いだ娘の安否が気になったため、余震が続きガレキが散乱する集落の中を、必死になって娘の嫁ぎ先まで走っていった(図 8-2)。

#### 原田三郎さん(当時 25 歳)

碧海郡明治村西端集落(現在の愛知県碧南市湖西町)にいた原田三郎さん(当時 25 歳)。隣家のおばあさんを救出したあと、当時近衛兵だった原田さんが真っ先に考えたことは「小学校にある両陛下の御真影を安全なところに移す」ことだった。そのため小学校まで駆けつけて、両陛下の御真影を自分の家の蔵に移した(図 8-3)。

#### 小山敏夫さん(当時 21 歳)

碧海郡明治村にあった明治航空基地で整備士官をしていた小山敏夫さん(当時 21 歳)は、地震が起きた後、急いで懐中電灯を持って、自分の整備担当機であった「彗星」(戦闘機)の被害状況を確認しに行き、無事であることがわかったため、部屋に戻りもう一度寝てしまった(図 8-4)。

#### 小林清さん(当時 29 歳)

碧海郡明治村にあった明治航空基地で軍医をしていた小林清さん(当時 29 歳)は、地震発生後、家族が無事であることを確かめたあと、医者として治療行為にあたるために、医療器具をとり基地へ向かって必死に走っていった(図 8-5)。

## 5.2 安否確認の実態

安否確認行動は、災害発生後における初期の災害対応行動の1つである。ここで興味深いのは、原田三郎さん・小山敏夫さんなどの事例からわかるように「安否確認は人間だけではなく自分が大切だと認識している事物も対象としている」ことである。広辞苑第五版で安否を調べると「無事かどうかということ。『安否が気づかわれる』『安否を問う』と定義しており[新村, 1998], 安否確認とは人間以外の事物についても対象としていることがわかる。

安否確認行動は、行動への動機づけが強く、「とにかく何としてでも安否を確認しなくては」と被災者を強く突き動かす行動であることが考えられる。安否確認が速やかに達成された場合には、軍医だった小林清さんの体験のように、そのまま次の対応行動に移ることができるが、安否確認ができなかった場合には、安否確認が達成されるまで、被災者は安否確認行動にとらわれて「居ても立ってもいられない」状況が続くことが考えられる。その結果、行うべき他の災害対応に

着手することが難しく、その後の対応も後手後手にまわり、最終的には生活再建にも影響・支障がでることが予想される。

この意味で安否確認行動は、その後の生活再建にもつながる行動であり、災害発生前から、安否確認の対象や手段について十分に考慮し、備えておく必要がある。

## 5.3 安否確認の事例から浮かびあがってきた教訓

三河地震の事例からさまざまな安否確認の姿がわかったが、多くの人に当てはまる最も一般的な安否確認は、岡田菊雄さん・杉浦隆三さん・小林清さんの事例のような「家族の安否確認」だと思われる。

家族の安否確認を行うとき、特に今の時代のように別居している親・子どもなどが遠隔地に住んでいる場合には、「走って訪ねていく」ような杉浦さんの経験とは違った方法で安否を確認しなければいけない。現代だと、1)携帯電話メール、2)災害用伝言ダイヤル 171、3)遠方の親せきを連絡拠点にする、の3つが効果的であると言われている。

携帯電話メールは、2004 年新潟県中越地震で大活躍した。これは多くの携帯電話では音声とデータ(メールなど)をわけて処理していて、災害時には負荷の大きな音声には制限をかけるが、負荷の小さなデータには制限をかけないからである。また携帯電話のデータ通信では、災害時になると「災害用伝言板」がトップメニューに出てきて、そこから安否確認のやり取りをすることもできる。詳細は各携帯会社のホームページなどで広報されている。

災害用伝言ダイヤル 171 も有効な手段である。これは災害発生時に 171 番に電話をかけ、音声ガイダンスに従って「被災地内の電話番号(市外局番を含む)」を暗証番号にすると、安否等の伝言を 1 伝言あたり 30 秒、計 10 伝言を預かってくれるサービスである。震度 6 弱以上の地震発生時もしくは地震・噴火等の発生により、被災地への通信が増加し、つながりにくい状況になった場合にサービスが開始される。例年、防災週間(防災の日(9月1日)を含む1週間)および防災ボランティア週間(1月15日～1月21日)などの時に体験することができる。

被災地ではない遠方の親せきを連絡拠点にすることも効果的である。災害が発生すると、大勢の人が被災地内に電話をかけるため、固定電話・携帯電話ともにつながりにくくなる。しかし被災地内から被災地外へかける電話はつながりやすく、遠方の親せきが安否確認の取りまとめや対応窓口になってもらえるのならば、被災者は安否確認に忙殺されずに、速やかに別の行動に着手することができる。

安否確認行動は 60 年前も現在も共通する重要な災害対応行動であり、現代社会・個々の家庭の事情に即した対応策を立てることが必要不可欠であること





8-1 岡田菊雄さんの被災体験  
Mr. Kikuo OKADA's experience



8-2 杉浦隆三さんの被災体験  
Mr. Ryuzou SUGIURA's experience



8-3 原田三郎さんの被災体験  
Mr. Saburo HARADA's experience



8-4 小山敏夫さんの被災体験  
Mr. Toshio KOYAMA's experience



8-5 小林清さんの被災体験  
Mr. Kiyoshi KOBAYASHI's experience

図8 安否確認の被災体験

Fig 8. Paintings of "Confirmation of Safety"  
of the Survivors' Experience in the disaster

が考えられる。

## §6. おわりに

本論文では、インタビュー調査で得られた 1945 年三河地震被災者の被災体験を事例に、地震発生から発生後 100 時間前後までにおける被災像を明らか

にした。特に、この時期において特徴的である「失見当」「救助・救出」「安否確認」について、三河地震の被災体験を整理し、そこから得られた実態をまとめ、今後の災害に向けての教訓を抽出した。

「失見当」は三河地震においても、ほとんどすべての被災者に見られる心理状態であった。このような心

理状態に陥ったとしても、「こういう状態は自分だけではなくて、人間としてごく自然な状態なのだ」という知識・認識を平時から持つておくことが、必要以上に慌てず、不適切な対応行動を低減するためには必要であることが考えられる。

「救助・救出」においては、基本は自助(自分や家族の力)であることが三河地震の経験からも再確認された。共助(地域などの力)は被害が大きくない地域においては有効であるが、激甚被災地の場合、「助けてくてもどうしようもできない」状況が展開されることが明らかになった。このような事実をふまえた上で、高齢者の一人暮らし世帯等は、「災害時には、自分の家の安否確認を自治会・自主防災組織に積極的に行ってもらおう」という事前の努力・備えが必要であることがわかった。

「安否確認」は、60年前の三河地震においても、被災者にとって優先順位が高く、「居ても立ってもいられなくなる」行動であることがわかった。特に「家族の安否確認」が、その後の迅速な災害対応に移行できるかどうかの要であることが明らかになった。安否確認については、現代社会・個々の家庭の事情に即した対応策が必要不可欠であることがわかった。

2003年宮城県北部地震、2004年新潟県中越地震、2005年福岡県西方沖地震など、毎年のように大きな被害を伴う地震災害が発生している。日本に住んでいる限り、自分が地震災害の被災者になる可能性は低くはない。地震による被害を極小化するためには、事前の備えが重要である。特に被災者が地震発生後にどのような心理状態に陥り、どのような行動・対応をしなければいけないのかについて、過去の事例を材料に考え、実際に対策を立てて備えていくことが必要になる。

原田三郎さんは「大切なのは慌てないことだ。慌てもどうにもならない。立ってもいられない地震ならどうすることもできないから、慌てる必要もない。自分のやるべきことを1つ1つこなしていくことが大切だと思う」と総括している。富田達躬さんは「慌てないことが大切。突然の事態だが、何をすれば自分が助かるか、人を助けることができるのかを冷静になって考える必要がある。そのためには普段からどのような備えをしてどう行動するかということを考えておくことが大切である」という私たちへのメッセージを残している。

三河地震から60余年が経過した。地域の被災体験者は年々減少している。しかし半世紀以上が経過した今でも、三河地震から得られた教訓は、来るべき災害に対する防災を考える際の基礎資料として、その価値は衰えていない。

## 謝辞

愛知県在住の原田三郎氏、富田達躬氏、杉浦隆三氏、小山敏夫氏、岩瀬繁松氏、小林清氏、岡田菊雄氏、早川ミサコ氏には度重なるインタビュー調査にも快く応じていただいた。また、鈴木敏枝氏、杳名美代氏、飯島孝子氏、三浦昭六氏、三浦俊子氏、三浦美恵子氏、佐野辰雄氏、加藤あき氏、榊原君枝氏は分量の都合で取り上げることができなかったが、インタビュー調査からは前者の方々同様、数多くの有益な教訓を頂戴することができた。

愛知県立芸術大学の阪野智啓画伯と藤田哲也画伯には、市民一人ひとりの心に深く訴える震災体験の絵を描いていただいた。

愛知県安城市在住の熊谷善之氏・斎藤弘之氏・石川嘉弘氏、蒲郡市教育委員会の鈴木伊昭氏・土屋善旦氏には調査地域や対象者選定などで大変お世話になった。安城市在住の間瀬トシ子氏には、被災体験を教訓にし社会に還元する試みの中で、市民の立場から数多くの支援をいただいた。また、本論文の編集者である林豊氏、査読者である井上公夫氏からは、適切にご指摘をいただき本稿の改善に大いに役立ちました。記して感謝いたします。

## 文献

- 飯田汲事, 1978, 「昭和20年1月13日三河地震の震害と震度分布」, 愛知県, 97pp.
- 木股文昭・林能成・木村玲欧, 2005, 「三河地震60年目の真実」, 中日新聞社, 220pp.
- 木村玲欧・林能成, 2004, 地域の被災体験を収集し共有するための手法開発—東南海地震と三河地震を例とした愛知県三河地域での取り組み—, 東京大学地震研究所 技術研究報告, 第10号, 12-20.
- 木村玲欧・林春男・立木茂雄・田村圭子, 2004, 被災者の主観的時間評価からみた生活再建過程—復興カレンダーの構築—, 地域安全学会論文集, No.6, 241-250.
- 木村玲欧・林能成, 2005, 被災体験の絵画化による災害教訓抽出・整理手法の提案—1944年東南海地震・1945年三河地震を事例として—, 歴史地震, 第20号, 91-104.
- 内閣府編, 2005, 「平成17年度高齢社会白書」, ぎょうせい, 185pp.
- 日本火災学会, 1996, 「1995年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書」, 日本火災学会, 398pp.
- 新村出編, 1998, 「広辞苑 第五版」, 岩波書店, 2988pp.